

Satsumasendai City Public Relations

薩摩川内

広報
さつませんだい

5

May.2020
vol.374

島立ちに思う



島立ちに思う

島立ち

甌島には、高校がありません。そのため、甌島の子どもたちは、中学3年生を終えると生まれ育った島を離れ、本土の高校へ進学することになります。

それを甌島では、「島立ち」と呼び、子どもたちを送り出します。

「島立ち」の漢字に「発ち」ではなく、「立ち」という字を当てるのは、「島立ち」が、単に島を離れるということではなく、甌島という故郷を背負って立つ、「自立した子どもを地域一体となつて育てる」などの意味が込められています。

この特集では、甌島の4つの中学校の生徒や家族にスポットを当て、島立ちに対する思いなどをまとめました。



休校前最後の島立ち



上甌中学校

4月から休校となった上甌中学校の休校前最後の卒業式

4月から休校することが決定していた上甌中学校では、3月12日に休校前最後となる卒業式が開催されました。

式では、一人ずつ卒業証書が手渡され、卒業生代表の中尾歩さんが、心を込め作成した手書きの学校新聞「海風」への思いを語り、育ててくれた地域や先生、家族への感謝の言葉を述べました。

式の最後には、在校生を含む生徒全員で校歌を斉唱し、卒業式は静かに幕を閉じました。

学校新聞「海風」の休刊

上甌中学校の休校は、同時に、創刊以来43年間受け継がれてきた学校新聞「海風」の休刊も意味していました。

海風は、校内だけでなく、地域の話題も取り上げ、手書

文章を書くのが苦手な子にはイラストを描いてもらうなど、何らかの形でみんなが取り組めるように工夫して。続けていくうちに、校内のみでのニュースに限界を感じ、おのずと行政や農協にインタビューをするようになり、地域の話題に触れ始めると、その取り組みが評価され、南日本新聞社主催の学校新聞で1席を受賞しました。

それがきっかけとなり、みんなの意識も爆発的に向上したと思っています。私は、ここまで続くとは思っていませんでしたが、記録に残すことのすばらしさ、大切さなど感じています。上甌中学校が休校になって、卒業生の以心伝心で、つづられた文化遺産がここにいつまでも残っていると思っています。



最終号の紙面 (第844号)



きにこだわって作成され続け、地域のさまざまな場所に届けられてきました。

学校新聞の枠を超えて地域に密着した情報紙としてたくさんの方の目を惹きつけてきたことでしょうか。

班長として、海風の作成に携わった瀨邊香乃さんは、「少ない人数で作成するからこそ出来上がった海風は私の自慢です。海風の作成ができて良かったです」とその思いをつづりました。

希望に溢れた4人

上甌中学校3年生で最後の卒業生となる4人は、初めての島立ちを経験するとともに、休校前最後の卒業生として、式の日を迎えることになりました。

記念撮影にのぞみ、笑顔を見せる4人の姿は、凛として上甌の未来を背負い、希望に溢れていました。



上甌中の文化遺産

海風の創刊に携わった当時の教員である瀬戸口正明さんは、こう振り返ります。

「海風は、上甌中学校創立30周年で、子どもたちのために何か残したいという話から発案されました。」

私は、学級新聞の作成経験を生かし、当時、全校生徒50人程度の上甌中学校で、生徒全員で参加する学校新聞として取り組みを始めました。



親子の島立ち 里中学校



父「楽しんでこい！」

子「楽しんでくるよ！」

里中学校では、子どもたちと保護者、それぞれの島立ちを取材しました。

庵地日風太さんの島立ち

里町でつけあげ店を営み、わが子の島立ちを初めて経験する庵地優さんは、こう語ります。

「子どもが15歳で島を出ることは、生まれたときから決まっていたこと。島立ちに当たって特別に何かを教えたことはありません。洗濯や料理についても日々の手伝いの中で自然と身に付けてきました。昨年までは厳しく育ててきましたが、今は、自信を持って送り出したいという気持ちです。これから親が教えられることはありませんが、自分で気づく学びを経験して欲しいと思います。」

鹿児島工業高校への進学が決まっている日風太さんは、「寂しい気持ちもあるけど、ただ楽しみ。希望しかない」と話してくれました。



息子「由莉美、吹奏楽と勉強がんばって！」

母「あはは」

父「俺にはなんかないの？」

娘「純輝、高校でも柔道で全国行けるようにがんばって！」

小川純輝さん 由莉美さんの場合

鹿児島工業高校に進む純輝さんと神村学園高等部に進む由莉美さんは、男の子と女の子の双子です。

2人は、どちらが兄、または姉ということもなく仲良く一緒に育ってきました。

港に勤務する父親の勝義さんは、「島立ちで一度に2人の子どもたちがいなくなってしまうのは、とても寂しい。島の学校とは違う大きな学校で2人がやっていけるか心配で不安」

一方、母親の麻紀さんは、「2人とも部活動に入るので、見に行くのが楽しみ。しょっちゅう見に行く」と笑顔。

純輝さんは、「新しい人たちと出会うのが楽しみ」、由莉美さんは、「勉強と部活は楽しみ。寮は、時間が決められているから少し残念」と明るい笑顔で話してくれました。

今では父親の勝義さんも娘の応援がなければ勝てなくなった親子の腕相撲。仲の良い親子の姿がここにありました。



父「財産を作って帰ってこい！」

子「結果を残して喜んでもらいたい」

母「寂しいけど自分で決めたことだから」

日笠山航太さんの場合

柔道の推薦で福岡市の沖学園高校に進学が決まっている日笠山航太さんは、「二人の兄が島立ちをしたときは、とても悲しくて寂しかった。今自分の番となり、やっていけるか不安でいっぱい。でも、自分で強い思いを持って決めたことだから毎日の努力で、結果も残して喜んでもらえたらと思う」と話し、父親でお食事処「海聖丸」を営む了盛さんは、「頑張れば、結果はついてくるし、最後には自分に返ってくる。友達や先生という財産を作って帰ってきてくれたら」。

母親の佳代さんは、「一番下の子で、できれば県内に残って欲しいと最後まで反対した。しかも、みんなより一足早く島立ちすることになって。寂しいけど、自分で決めた大事な3年間が先に繋がるようであれば、本人の意思が一番大事なのかなと考えた」と話してくれました。



謝恩会にて

里中学校の卒業式後の謝恩会では、お母さんたちが、子どもの中学校のジャージを着て参加するというユニークなコンセプトの中、卒業した子どもたち、保護者が集結しました。

もたち、保護者が集結しました。希望にあふれる子どもたちだけでなく、絆の深さを、物語るような全員の名ぶしい笑顔が印象的でした。

里中学校卒業生

- ・日笠山 渚
- ・庵地 日風太
- ・是枝 伊吹
- ・野島 凜
- ・馬場 萌香
- ・石原 蓮士
- ・小川 由莉美
- ・本心
- ・小川 湮央
- ・石原 太洋
- ・馬場 遥奈
- ・日笠山 航太
- ・西牟田 二海
- ・小川 純輝

伝統と文化の島立ち



海星中学校

郷土芸能や文化を重んじる 海星中学校の島立ち

海星中学校では、卒業生7人を含む生徒全員が地元伝統芸能に参加していました。長浜地区の「出羽踊」、青瀬地区の「青瀬ヤンハ」、鹿島地区の「鹿島太鼓」。

卒業生には出身者がいなかったものの西山地区には「シアノーノ」もあります。これだけ多彩な郷土芸能への関わりは、下甌島の広い郷土の中で、複数の地区から子どもたちが集まる海星中学校



出羽踊



青瀬ヤンハ

ならではなのです。また、海星中学校の子どもたちは、道を行く人だけではなく、通り過ぎる車にまでお辞儀をします。時には、後ろから接近する車に振り返ってまで深々とお辞儀をする姿は、下甌を訪れた人なら一度は目にし、感動すら覚えたことでしょう。

それは、車通りの比較的多い道路を歩いて帰るといいう海星中学校の立地と礼節を重んじる校風のためなのです。



鹿島太鼓



親と子

島で子育てをする親たちは、遠くない将来に島立ちを控え、子どもたちのために、時に厳しく、時に優しく炊事や洗濯、心構えなどを少しずつ教えていきます。

まだ幼さの残るわが子たちに、どんな思いで島立ちを伝え、どんな思いで見送るのか、その寂しさと不安は察するに余りあります。かけがえのない子どもたちを送り出した母親たちの声に耳を傾けます。

東柊仁さんの母 円さんの声

柊仁は、5人兄弟の真ん中で、海星中学校では、リーダーシップを発揮して生徒会長も務めさせていただいた責任感のある優しい子です。

進学する川内高校では、自己中心にならずに、良い意味で周りを気にしながら過ごしてほしいと願います。友だちができるかなとか先輩とうまくやっていけるかななどは心配していません。卒業後、何をするのか、まだ見えていないことが少し気になりますが、あの子ならきっと大丈夫と信頼しています。

兄の2人が先に島立ちし、すでに県外に就職していますので、本音としては、柊仁には、甌島に帰ってきてほしい、せめて県内など近くにいてほしいという思いがありますが、今は、ただ、無事に卒業させてくれたらという思いでいます。

前多夏海さんの母 彩子さんの声

夏海は、生まれたときからずっと甌島で育ちました。人前ではしっかりしている反面、実はあがり症で、弱いところもあるのに気を張っている、一人になったときのことを少し心配しています。

進学する川内高校では、今まで少人数では学べなかったこと、いろんな人がいるということ、その多様な社会や世界を学んできてほしいと思います。

将来は、単純に甌島に帰ってきてほしいとは思いませんが、島には何もないから住まないという理由ではなく、社会、日本だけでなく世界を見て、どこでもやっていける、生きていけるということを通して、そんな自分になって、将来生きるその場所の選択肢の一つに甌島があればそれでいいと思っています。

高山晴さんの母 舞子さんの声

幼稚園から甌島で過ごしていた晴は、運動が好きで明るい子です。身の回りのことは特に教えることもなく、小さい頃からやってきて、むしろ料理は好きで簡単なものはよく自分で作って食べていました。

海星中学校では、上下関係があまりなく、1年生も3年生もみんなが友達のような関係でしたので、高校で先輩後輩の関係がちゃんと築けるかは少し心配しています。

私も甌島で育ち、島立ちを経験していて、不安よりも楽しかったことをよく覚えていますので、晴もきっと同じような気持ちだと思います。

すでに将来やりたいことを持って、そのために川内商工高校を選んだようなので、部活動も含めて高校生活を純粋に楽しんでもらえたらいいと思っています。

7人の島立ち

昨日のことのように思い出す海星中学校への入学から、あつという間に三年の月日が流れました。笑ったり、泣いたり、いろんなことを経験し見違えるように成長しました。島立ちとは、別れではなく、未来へ向かって切る新しいスタートの象徴です。

伝統と文化に彩られた海星中学校の卒業生7人は、甌島で学んだことを誇りに、それぞれが目指す夢へ向かって島立ちをしていきました。





島から離れることは、とても悲しいですが、今まで島で学んできたことを生かす時が来たと思うとワクワクもします。これから自分のことは全て自分でしなければいけません。不安ですが、これも将来に向けての第一歩だと考え、頑張ろうと思います。

島立ちへの思い
濱田ほか
甌島は、自然が豊かで地域の人々が温かく笑顔が絶えない島です。夏休みには、みんなで海で泳いだことを覚えています。
海陽中学校の良いところは、少人数のため、先生方が生徒一人一人に向き合っていてさまざまなことを教えてくださった

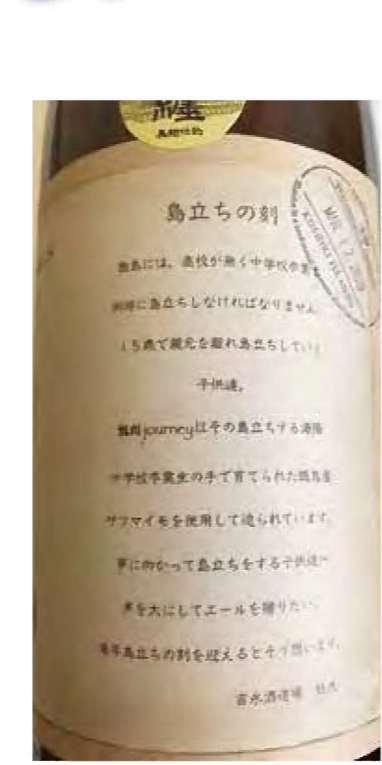


- 海陽中学校卒業生
- ・中村 郁水
 - ・濱田 ほか
 - ・植村 隼也
 - ・江口 健太
 - ・大毛 かや
 - ・福元 麻友
 - ・川畑 佳輝

子どもたちにエールを
今年、甌島から32人の子どもたちが、不安と期待を胸に本土の高校へ向けて島立ちをしました。
心配するご両親をよそに意外にもワクワクが止まらない好奇心に溢れた子どもたちが印象的でした。
これから、島では経験できないたくさんさんの経験を積み、時には島では考えられなかった苦難や壁にぶつかることもあるでしょう。
一緒に島立ちをした仲間たちと手をつなぎ、「島立ち」という言葉の意味と甌島で過ごした日々を時々思い出し、今の自分が甌島のために何ができるか、将来甌島のために何ができるか、そんなことも考えられる大人になってもらえたらと思います。

焼酎に込めた 故郷への思い 海陽中学校

こと、自然と触れ合う授業がたくさんあったこと、全学年が先輩後輩関係なく、仲が良かったことなどたくさんあります。運動会では小学生と地域の人と協力したことも思い出の一つとして残っています。その中でも一番の思い出は、先生方と生徒が協力して、焼酎芋を作れたこと。完成した時はとても感動しました。吉永酒造の方々が思いを込めて造って下さった焼酎を20歳になつて飲むことを今から楽しみにしています。



将来、甌島に帰ってくることは、旅立つ今は考えられませんが、たくさんの人に甌島の良さを知ってもらいたいと願っています。
そのためには、もっと甌島のことを知りたいなと思います。

今年、海陽中学校の3年生を中心に生徒22人が耕した畑で大事に育てたサツマイモが、甌島での思い出を封じ込めた千本の焼酎「甌州 Journey」へと生まれ変わりました。
卒業記念に子どもたちに1本1本贈られる「甌州 Journey」はまさに、「世界でただ一つだけの焼酎」なのです。
ふるさとの優しさと思い出がたつぷり詰まったその焼酎の味は、果たして甘いのか辛いのか、それを感じられるのは、島を立ち上るいろいろな経験を積んで大人になった時の子どもたちだけです。



焼酎の名前も、当時の卒業生である子どもたち自身により、吉永酒造の代表的銘柄の「甌州」に、船旅など、比較的長い「旅」や、ある段階から次の段階への道のりを意味する「Journey」(ジャーニー)をつなげて、「甌州 Journey」と名付けられました。

島立ちをする子どもたちのために何か残してやりたいという思いから、海陽中学校では、2年前から地元酒蔵「吉永酒造」と協力して、子どもたちが育てたサツマイモを使用した焼酎を造っています。



海陽中学校3年生が育てたサツマイモで造る吉永酒造の焼酎それが「甌州 Journey」